

令和元年6月17日現在

機関番号：30110

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26463352

研究課題名(和文) 外来化学療法を受けるがん患者の家族に対する多職種協働支援プログラムの普及

研究課題名(英文) The spread of a support group program for the families of outpatients undergoing chemotherapy for cancer

研究代表者

平典子(Hira, Noriko)

北海道医療大学・看護福祉学部・教授

研究者番号：50113816

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：成果は、(1)外来化学療法を受けるがん患者の家族に対する多職種協働による支援プログラム「がん患者と歩む家族の会」の有用性を明らかにしたこと、(2)普及を目的に教育プログラムを作成し介入したことにより(3)がん診療連携拠点病院において家族支援プログラムとして「がん患者と歩む家族の会」が採用されたことである。本プログラムでは、30人の対象者において、尾関コーピング尺度、健康の捉えシートが肯定的に変化し、プログラムの有用性が示唆された。また、支援プログラムの目標、内容、基本原則、準備からファシリテータ役割および当日のスケジュールを含むプロトコルの使用により、がん診療連携拠点病院での開催が実現した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がん診療拠点病院では、家族に対する支援を含みがん医療における中心的な役割を担うことが期待されている。しかしながら、がん患者および家族に対する支援の多くは、看護師や臨床心理士が行う個別の支援であり、患者会や家族会のようなグループ支援体制の整備は依然として進んでいない現状にある。本研究では、支援プログラム試案のプレテストを踏まえ、がん診療拠点病院において外来化学療法を受けるがん患者と生活する家族に対してサポートグループによる支援を実施した。これにより、家族のQOL向上に貢献するとともに、がん診療拠点病院における家族支援のための社会資源として発展する可能性を含んでおり、本研究の意義は大きいと言える。

研究成果の概要(英文)：This study aims at examining the helpfulness of a support group program for the families of outpatients undergoing chemotherapy for cancer, and spreading of this support group program at a special hospital for cancer treatment. The program consists of three sessions according to its three goals, 1) Enhancing coping skills, 2) Promoting the physical and psychosocial stability of each participant and 3) Developing a positive attitude toward life with a family member who is undergoing chemotherapy. Regarding 30 participants, Ozeki's Coping Scale, participants' perspective for their own health were changed respectively. Educational program for this support group program were created. And this support group program were adopted at a special hospital for cancer treatment using the educational program.

研究分野：医歯薬学

キーワード：外来化学療法 家族看護 サポートグループ 多職種連携

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

わが国では、診療報酬改定による外来化学療法加算の開始、抗がん剤の開発や副作用対策の進歩などから、化学療法を受けながら自宅で過ごしているがん患者が急速に増加している。そして、このような治療環境の変化に伴い、外来化学療法を受けるがん患者と暮らす家族は、治療に伴う問題に対処しながら種々の影響を受けていることが判明している。

すなわち、家族には、治療の影響による患者の体調変化に動揺し、患者との新たな関係性に戸惑う様子が見られている<sup>1)</sup>。我々が実施した調査<sup>2)-6)</sup>においても、ケアギバーとして独自の方法を駆使しながら応えきれない思いを抱え医療者にその思いを語りたいと考えていること、また、自身の健康に支援を求めていることが明らかになっている。さらに、家族にとっては、ときに患者より強い抑うつ状態を呈していても医療者からの支援が得られず、治療の変更や副作用の出現など長期的な変化に対応した支援が受けられていないことも指摘されている。

そこで我々は、外来化学療法を受けるがん患者の家族に対する支援として、サポートグループに着目し、支援プログラム試案を実施した。その結果、POMSの緊張や疲労の軽減、活気の増加、コーピング尺度での回避の低減傾向などから支援プログラムの有効性が示唆された。また、家族ひとり一人が知りたい情報には研究者の予測を超えた個性があることも判明し、そのニーズに応えるためには多職種での協働が必要と考えられた。他方で、家族には、支援プログラムに参加したいニーズはあるが仕事と患者の世話以外に時間がとれない、心配で患者から離れられないなどの理由から参加が得られにくい実情が見られた。また、患者の病状変化などから、途中で参加を断念せざるを得ないという状況も明らかになっている。これらの結果から、家族に対する支援プログラム試案の成果は期待されるものの、参加人数が十分得られていないために有効性のさらなる検証が必要であるといえる。さらに、支援プログラムの成果を確実なものにするためには、前述のような家族が抱える参加の難しさを踏まえ、セッション回数の見直しとともに、がん診療連携拠点病院での支援プログラムの普及が必要であると示唆される。

### 2. 研究の目的

本研究では、外来化学療法を受けるがん患者の家族に対する多職種協働支援プログラムの普及をめざして、以下の研究目標を設定した。(1) 外来化学療法を受けるがん患者の家族に対する多職種協働による支援プログラムの有用性を検証する。(2) 多職種協働支援プログラムの普及をめざし、支援プログラムを運営するため教育プログラムを作成する。

(3) 教育プログラムに基づく説明を受けた看護師を中心としてがん診療連携拠点病院において支援プログラムを実施し、外来化学療法を受けるがん患者の家族に対するグループ支援のあり方を検討する。

### 3. 研究の方法

(1) 外来化学療法を受けるがん患者の家族に対する多職種協働支援プログラムの有用性の検証

がん診療連携指定病院、がん診療連携拠点病院での開催に協力が得られた A 市 B および C 病院と連携し、支援プログラム「がん患者と歩む家族の会」を実施した。

A. 「がん患者と歩む家族の会」の実施および評価(26年度)

「がん患者と歩む家族の会」の作成(表1):平成22年~25年の研究実績(基盤研究(C)22592461)に基づき、表1に示したプログラム目標、支援内容および評価指標を採用した。

実施:A市にある研究者所属機関のサテライトキャンパスにおいて実施した。プログラム参加者は、研究の同意が得られた外来化学療法を受けているがん患者の家族で、原則としてプログラムの全セッションに参加できる者とした。支援プログラムの運営では、研究者はファシリテータを担い、B病院のがん看護専門看護師、がん化学療法認定看護師、栄養士および理学療法士にサブファシリテータ、情報提供者、受付等の役割を依頼した。

評価:プログラム全体の目標達成度を明らかにするために、プログラム前後で「自身の健康の捉え」シートおよび尾関コーピング尺度による評価指標を用いた。「自身の健康の捉え」シートでは、自分の気持ちの表出やリフレッシュの工夫、治療などの知識の獲得およびケアギバーとしての役割に対する考えに関して9項目設定し、「強く思う~まったく思わない」という4段階尺度を採用した。このシートは、平成22年度から25年度における調査結果に基づき研究者が作成した。また、セッション目標の達成度の評価では、セッション評価表を用いた。セッション評価表では、セッションごとにセッションの目的が理解できたか、提供された情報を理解できたか、自分の気持ちを話せたか、グループの話し合いに参加できたか、他の参加者の話は有益かという5項目を設定し、「大変そう思う~まったく思わない」という4段階尺度を採用した。

表1 支援プログラム「がん患者と歩む家族の会」の概要

プログラム目標: 外来治療を受けるがん患者と暮らす家族が、状況の変化に対応しながら前向きに生活する姿勢を強める - 対処力の向上、心理・社会的な安定、家族との生活への前向きな捉え

セッション1	セッション2	セッション3
がん治療について学ぶ	自分の気持ちをみつめ心身の安定を図る	これからの生活を考える
がん治療について基本的なことを学ぶ 治療を受ける家族との生活で困っていることを振り返る	自分の気持ちを振り返り、知る 気持ちを他の人に伝える方法を知る 気持ちの安定を図る対処法を知る	状況の変化に対応するための情報、知識を獲得する 治療を受ける家族とのこれからの生活について考える 自分の健康に対する捉えを知る
セッション内容 ・メンバーと知り合う ・情報提供：がん治療、副作用対策 ・リラクゼーション 話し合いのテーマ ・自己紹介 ・治療について気になっていること、副作用対策	セッション内容 ・メンバーとの交流 ・情報提供：「家族」の特徴、気持ちが不安定になる状況と対処法 ・リラクゼーション 話し合いのテーマ ・治療中の家族との生活で変化したこと、工夫 ・自分の健康のために行っている対処、できそうな対処	セッション内容 ・情報提供：治療中の食事・栄養活用できるリソース（患者会、ネット情報、在宅サービス、緩和ケアなど） ・リラクゼーションと茶話会 話し合いのテーマ ・食事の工夫 ・これまでのセッションで感じたこと ・これからの生活についての今の気持ち

B. 「がん患者と歩む家族の会」修正版の実施と評価（平成 27 年度）

修正版としての変更内容を下記の 2 点とした。

修正内容：平成 26 年度において、家族にとって全セッションへの参加が難しいことが判明したため、参加の機会を確保するために回数を変えずに従来通り実施することにした。内容については、情報提供と参加者の交流がつながるようセッションの流れを修正した。

会場と運営の変更：会場を C 病院とし、C 病院のがん看護専門看護師等にファシリテータおよびサブファシリテータ役割を依頼した。

(2) 「がん患者と歩む家族の会」を運営するため教育プログラムの作成（平成 28 年度）

プロトコル作成：平成 29 年度における C 病院での開催をめざし、プログラムの目標と内容、支援プログラムの開始にむけた準備、ファシリテータ・サブファシリテータの役割を含むプロトコルを作成した。

ファシリテータ役割に関する研修プログラムの作成：研修プログラム名を「がん患者と歩む家族の会 ファシリテータ役割研修」とし、研修目的、サポートグループの意義、「がん患者と歩む会」の概要、ファシリテータの役割、コミュニケーションの基礎技法、参加者の交流で起こりうる状況への対応を含む試案を作成した。平成 29 年度および 30 年度において、看護師による企画・運営の評価、および運営に参加した看護師を対象にグループインタビューを実施し、その結果を踏まえて研修プログラムを修正することにした。グループインタビューでは、看護師が捉える「がん患者と歩む家族の会」の成果と課題、ファシリテータの役割および役割の担い方を調査することにした。

(3) がん診療連携拠点病院における「がん患者と歩む家族の会」実施および評価（平成 29、30 年度）

運営プロトコルに基づく説明を受けた看護師が企画する「がん患者と歩む家族の会」を実施し、外来化学療法を受けるがん患者の家族に対するグループ支援のあり方を検討した。

実施

a 協力施設：A 市 C 病院。がん看護専門看護師（研究協力者）が中心となり、がん化学療法認定看護師、医師、薬剤師、栄養士および理学療法士の協働のもと実施した。プログラム参加者は、研究の同意が得られた外来化学療法を受けているがん患者の家族で、原則としてプログラムの全セッションに参加できる者とした。

b 運営方法：プログラムの企画、運営については、C 病院のがん看護専門看護師が担当した。企画、運営の内容は、実施日の設定、家族に対する広報、会場設定およびファシリテータとサブファシリテータや情報提供者との打ち合わせであった。研究者は、プログラム実施のスーパーバイザーとして参加した。

評価

a プログラムの効果を明らかにするために、「自身の健康の捉え」シート、尾関のコーピング尺度およびセッション評価表を使用した。

b がん診療連携拠点病院で実施する「がん患者と歩む家族の会」の成果と課題を明らかにするため、C 病院の看護師 6 人を対象にグループインタビューを実施した。

「がん患者と歩む家族の会」ファシリテータ研修プログラムの作成

2 年間の実施およびグループインタビューの分析結果を踏まえ、研修プログラム試案を修正

した。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、(1)外来化学療法を受けるがん患者の家族に対する多職種協働による支援プログラム「がん患者と歩む家族の会」の有用性を明らかにしたこと、(2)がん診療連携拠点病院での普及に向けた教育プログラムを作成したこと、(3)がん診療連携拠点病院における家族支援システムとして、「がん患者と歩む家族の会」を推進したことである。以下、これらに関して述べる。

(1) 外来化学療法を受けるがん患者の家族に対する多職種協働による支援プログラム「がん患者と歩む家族の会」の有用性

研究期間における「がん患者と歩む家族の会」の実施状況および評価について述べる。

##### 実施状況

4年間に於いて、参加した家族は30人であり内男性が5人であった。年齢は40歳代から80歳代の範囲で平均64.8歳であり、患者との続柄では配偶者33人、親・兄弟・子ども各2人、友人1人であった。また、全セッションに参加できた家族は、約半数の16人であった。

##### 評価

プログラム全体の目標達成度の評価では、「自身の健康の捉え」シートおよび尾関コーピング尺度による評価指標を用い、プログラム参加前後で変化を比較した。また、セッション目標の達成については、セッション評価表の記入内容で検討した。

結果、「自身の健康の捉え」シートでは、各項目について「思う」「思わない」で分類すると、参加後、「自分の気持ちは話さないほうがよい」「自分の気持ちを話すことができる」「治療について知るほど適切に対応できる」は肯定的に変化した者がいた。「家族に対して関わっているがまだまだ足りない」「家族を常に優先すべき」は前後とも「思う」であり、ケアギバーとして役割を担おうとする家族の気持ちの強さに変化は見られなかった。尾関コーピング尺度を前後で比較すると、問題焦点型は7.5、6、情動焦点型は6.5、8、消極的コーピングは8、9となった。前後での大きな変化は見られなかったが、前における情動焦点型は、他の2つに比して低い傾向にあったが後では上昇の傾向を示した。セッション評価表を「思う」「思わない」に分類すると、セッション目的の理解、提供された情報の理解、自分の気持ちを話す、グループの話し合いに参加できる、他の参加者の話は有益という5項目いずれもほぼ「思う」であった。平成29年度の参加者1人のみ、第2セッション評価に「思わない」が見られた。

以上、「自身の健康の捉え」シートおよび尾関コーピング尺度の変化から、「がん患者と歩む家族の会」は参加者が自分の気持ちを話す機会として有用性があることが示唆された。また、セッション評価表による目標達成度の高さから、セッション内容はプログラムの目標に対応していると評価できた。

(2) がん診療連携拠点病院における普及をめざした教育プログラムの作成

##### 運営プロトコル(表2)

「がん患者と歩む家族の会」の目標、プログラムの内容および基本的な考え方を理解したうえで運営できるように、以下の4つの内容構成とした。

表2 「がん患者と歩む家族の会」運営プロトコル

プログラムの目標
外来治療を受けるがん患者と暮らす家族が、状況の変化に対応しながら前向きに生活する姿勢を強める - 対処力の向上、心理・社会的な安定、がん治療を受ける家族との生活に対する前向きな捉え
プログラムの内容(表1)
1. 「がん治療について学ぶ」「自分の気持ちを見つめ心身の安定を図る」「情報・知識を獲得しこれからの生活を考える」をテーマに3セッション構成とする。セッションごとの目標が定められている。 2.各セッションは、参加者間の交流、知識・情報の提供、リラクゼーションで構成される。 3.所要時間については、おおむね100分とする。
基本原則
1.参加者が自分と向き合えるように、気づき、考え、対処方法を模索できる機会を創り出す。 2.参加者が自分と向き合う中で、心を整え、これからも歩み続けようという気持ちが高まり、考え方・行動が変化し始めることを支える。 3.看護師、医師、薬剤師、栄養士、理学療法士と協働する 基本原則に則り、参加者の交流が中心となるようにグループダイナミクスの活性化、参加者のピアサポートを生み出す環境を整える。また、参加者個々のニーズに対応した支援を実施する。
運営のプロトコル
責任者の役割 1.運用責任者は、資料1・2を使用し、プログラムの目標、内容、基本原則およびプロトコルについての理解を促進する。 2.参加者への広報、提供する知識や情報について、チームで内容を確認し事前に打ち合わせを行う。 3.セッションごとの役割分担を考える。

ファシリテータ、サブファシリテータ、セッションごとの進行、知識・情報提供者、受付、評価用紙の配布と回収、茶菓の準備

#### ファシリテータの役割

- 1.参加者全員が発言できるように気配りし、言葉をかける。
- 2.参加者が自分の気持ちや問題に気づききっかけをもてるよう話し合いを進める。
- 3.参加者が互いに支えあふ雰囲気や育つよう、心地よい環境を提供し、交流を促進する。
- 4.参加者の健康状態に配慮する。

#### サブファシリテータの役割

- 1.各セッションにおいて、参加者の話し合いを簡潔に紹介する。
- 2.会が始まる前、休憩および話し合いに参加できない参加者に対し個別に対応する。
- 3.評価表、「健康の捉え」の配布と回収。

#### 準備

- 1.会場、BGM、がん情報パンフレット、参加者への配布資料、茶菓、ネームプレート、筆記用具など（予算は看護部もしくは参加者から）。
- 2.参加者への広報活動。
- 3.途中参加者への対応を考える。

#### 当日の運用

- 1.開始1時間前に集合し、最終打ち合わせ、受け付準備を行う。
- 2.受付開始（30分前）
- 3.セッションスケジュールに合わせて会を進行する。  
司会者は、開始にあたり会の趣旨を説明し、参加者の背景、話し合いの状況等により、タイムスケジュールを検討する。
- 4.初回および3回目のセッションでは、最後に、参加者に「健康の捉え」を記載してもらおう。記名式とし、3回目には参加者自身に変化を確認してもらおう。いずれも、3回目のセッションにおいて参加者には現本を返し、運用者はコピーを保管する。
- 5.各セッションでは、セッション最後に無名式で評価表を記載してもらい回収する。
- 6.会終了後に反省会を行い、次の運営内容や方法を決定する。セッション評価表の内容を基に、それぞれの役割、目標達成に関して評価を行う。必要時、次の運営を修正する。また、グループダイナミクスおよび参加者個々の反応と評価表の内容から参加者個々のニーズに対応した支援を検討する。

運営プロトコルを活用した説明を受け支援プログラムを企画・運営した看護師は、この会の成果として、家族にとって「本人の前では言えないことを“ぶちまける”」場になると語った。また、サポートグループの特徴について、看護師との1対1の関係とは異なり「ピアサポートのダイナミクスが生まれる」ことにより「“言い捨てる”ことができる関係がある」「一気に辛さをはき出す場に変わる」という特徴が見られると捉えていた。また、「医療者のサポートではみられない感情がでる」ことから、看護師にとっては「家族を個として捉える広がりをもたらす」と語った。さらに、家族自身には、「語りながら涙する自分を発見する」、自らがピアサポートを求めて「話す場を外来につなげる」という変化が生じていると捉えていた。院内で実施する意義について、「長い目でケアできる」「早い時期での支援が可能になる」と会への参加後も継続的に支援できることがあげられた。参加した家族の反応については、「2回目での変化が大きい」と捉えており、3回のセッションの意味を見いだしていた。課題としては、会の運営自体というより、家族支援の観点が広がったことにより、治療の中止や自宅から出られないなど「見えない家族」、曜日や仕事など条件が合わずに「参加できない家族」に対する支援の必要性を語っていた。

ファシリテータ役割については、「気持ちの変化を読み取る」「全体を見て交流の流れを作る」「ばらばらの交流を1つの輪につなげる」「ピアサポートを創造する」「自由な語りの場を創る」をあげていた。一方で、「自由な交流を戻そうとする自分」「ケアしようとする自分」に戸惑い、「広がる話を止めない」ことは難しいと感じていた。

#### ファシリテータ役割研修プログラム

上述のインタビュー結果を踏まえ、研修プログラムの内容について、第1部；目的、サポートグループとは、「がん患者と歩む家族の会」概要、第2部；ファシリテータの役割、第3部；コミュニケーション演習という3部構成とした。また、演習については下記のように企画した。

ねらい：ピアサポートとしてのグループダイナミクスの活性化、自由に話せる場の創造、発言をグループ内の話に広げるコミュニケーション力の養成

内容：「聴く」力とは

方法：1グループ3人で編成し、聴く、話す、観察するという役割を交互に体験し、「聴く」とはどのような特徴を持つのか、参加者および運営者にどのような変化をもたらすのか話し合う。その内容から、ファシリテータとしてグループダイナミクスを活性化させる方法、自由に話せる場の創造、グループ内での話の輪を拓ける方法についてメンバー間で話し合う。

(3)がん診療連携拠点病院における「がん患者と歩む家族の会 in TKH」の開催

開催に向けた準備

a 会の位置づけ；がんサロン同様、C病院において担うべき事業として位置づけ、開催日を

平日とした。

b 開催に向けたトレーニング；平成 27 年度、C 病院外来化学療法センターにおいて、研究者が企画・運営する会を開催し、C 病院の看護師、医師、栄養士、理学療法士に広報、会場設定、情報提供、ファシリテータ、サブファシリテータなどの役割を分担してもらった。治療などの情報提供者に関しては、会の趣旨を確認しながら情報提供の内容および方法について詳細を確認した。当日は、セッション終了後、会の運営に参加した者全員で運営方法や内容等を振り返り、参加者の反応の意味を捉えながら、次のセッション運営および個別対応について検討した。

「がん患者と歩む家族の会 in TKH」の開催

平成 29・30 年度、C 病院のがん看護専門看護師による企画・運営のもと、看護師、医師等の参画も得て開催された。研究者は、企画・運営担当者に対してプロトコルを使用して会の運営を説明し、当日は直接運営に携わらずスーパーバイザーの立ち位置をとった。

平成 29 年度の評価において、セッションの目標達成度が低い状況があり、企画者に対してセッション終了後の振り返りの意義、ねらいと評価内容の関連性について再度説明した。特に、運営プロトコルに記載されている「グループダイナミクスおよび参加者個々の反応と評価表の内容から、参加者個々のニーズに対応した支援を検討する」ことの意義について、メンバー間で確認があった。平成 30 年度、研究者は、初回のセッションに参加し、セッション終了後の振り返りおよび参加者の個別性にどのように対応するかスーパーバイズした。

参加者からは「とてもよい試みだ」「時期を変えてもっと開催してほしい」「曜日を变えて開催を」などの反応があり、運営側はがん診療連携拠点病院で開催する意義について手ごたえを感じていた。

#### (4) 今後の展望

検討を要する課題には、家族が全セッションに参加することが難しい状況を見据えた対応があげられる。C 病院では、参加者の要望を踏まえ、令和元年には夏と秋 2 回の開催を企画しているが、途中参加や途中から参加できなくなった場合、外来看護師等との連携も視野に対応を検討することが重要である。課題の 2 点目は、インタビュー結果でもでているように、参加者が少なくても運営側のスタッフには人数確保が必要になることである。がん診療連携拠点病院での事業として家族支援プログラムを定着させるためには、関わるスタッフを養成し増やしていくこと、薬剤師の参加も検討することが課題と言える。そのためにも、ファシリテータ役割研修プログラムを実施し、そのプログラム効果の検証、内容の精選を図ることが課題である。

引用文献

- 1) 竹内抄與子, 藤野文代(2012) 外来化学療法を受けているがん患者の家族の体験. ヒューマンケア研究学会誌, 3,17-24.
- 2) 鳴井ひろみ, 本間ともみ, 平典子 (2013) 外来がん化学療法を受ける患者の家族の療養生活に関するニーズ. 日本ヒューマンケア科学会誌, 6(1);11-19.
- 3) 平典子 (2007) 終末期がん患者を看取る家族が活用する折り合い方法. 日本がん看護学会誌, 21(1);40-47.
- 4) 平典子, 唐津ふさ, 田中いずみ, 鳴井ひろみ(2013) 外来治療を受けるがん患者の家族が活用するケアギバーとしての手段, 日本がん看護学会学誌, 27,214.
- 5) 田中いずみ, 平典子, 唐津ふさ, 鳴井ひろみ(2013) 外来治療を受けるがん患者と暮らす家族ケアギバーの思い, 日本看護研究学会誌, 36(3);349.
- 6) Noriko Hira, Fusa Karatu, Izumi Tanaka, Hiromi Narui (2013) Family support for outpatients undergoing cancer treatment, 215, *Supportive care in cancer*

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：鳴井ひろみ  
ローマ字氏名：( NARUI, hiromi )  
所属研究機関名：青森県立保健大学  
部局名：健康科学部  
職位：教授  
研究者番号(8桁)：10237620  
研究分担者氏名：唐津ふさ  
ローマ字氏名：( KARATU, fusa )  
所属研究機関名：北海道医療大学  
部局名：看護福祉学部  
職位：講師  
研究者番号(8桁)：20285539

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：田中いずみ  
ローマ字氏名：( TANAKA, izumi )  
研究協力者氏名：石井奈奈  
ローマ字氏名：( ISHII, nana )